OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宗教空間に接続する寺院ボランティア活動 : 中国広東省深セン市の都市寺院の社会的機能
Author(s)	高, 天霖
Citation	宗教と社会貢献. 2026, 16(1), p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106691
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論文

宗教空間に接続する寺院ボランティア活動
―中国広東省深セン市の都市寺院の社会的機能―

高天霖*

Temple Volunteer Activities Connecting to Religious Space
The Social Function of Urban Temples in Shenzhen, Guangdong, China

GAO Tianlin

論文要旨

本稿は、中国深セン市の二つの仏教寺院におけるボランティア活動を事例に、当該活動が寺院と都市において果たす役割と、宗教性との関係を検討した。

都市寺院では、ボランティアが世俗的側面を、僧侶が宗教的側面を担い、管理職僧侶とボランティアリーダーが両者を架橋することで、日常的な運営が維持されている。他方、多くのボランティアは世俗的動機から参加しており、寺院は異質な空間として、高ストレスな都市に生きる人々のニーズに応えている。短期的な参加者に宗教性は伝わりにくいが、長期的な参加者にとっては、活動が宗教性へと緩やかに接近する間接的な経路を構成しうる。寺院ボランティア活動は対内・対外の二重の機能を担い、世俗化した都市において一定の社会貢献を果たしている。

キーワード　都市寺院、ボランティア活動、宗教への経路

This paper examines volunteer activities at two Buddhist temples in Shenzhen, China, focusing on their role within the temple and the city and their relationship to religiosity.

Volunteers take charge of the secular dimension while monks attend to the religious one, with the managing monk and the volunteer leader bridging the two groups, thereby sustaining the temple's everyday operation. Many volunteers, however, participate for secular reasons, and the temple, as a space apart, meets the pressing needs of people in a high-stress city. While religiosity is not readily conveyed to short-term participants, for long-term participants the activity can constitute an indirect pathway through which one gradually approaches religiosity. These activities thus carry a dual function, inward and outward, contributing to an increasingly secularized urban society.

Keywords: urban temple, volunteer activity, pathway to religion

* 北海道大学大学院文学院人間科学専攻・博士後期課程

1. はじめに

世俗化が進む東アジアの現代都市では、都市住民と制度的な宗教との距離が広がっていると認識されることが多い。同時に、寺院での活動に参加する人々は、主に信者であると考えられがちである。しかし、中国深セン市の都市寺院では、必ずしも宗教・信仰を前提としているわけではない多くの都市住民が、ボランティアとして寺院に集まっている。

これまでの議論では、宗教ボランティア活動の参加者は、多くの場合、自らの信心に基づいて利他的で無償の行為を行う宗教関係者であると指摘されてきた。さらに、中国の寺院における伝統的なイメージでは、ボランティア活動は、時間に余裕のある定年退職者や高齢者によって行われることが多い［譚 2018］。

一方、人々の強い自意識、自分のライフスタイルを表現しようとする意欲、自分の物語を構成する他者とのつながりの重要性と、宗教行為や宗教文化との親和性が指摘されている［櫻井 2008］。つまり、純粋に宗教・信仰的な要素以外にも、都市住民の参加を促す、見過ごされがちな要因が存在する。

2022 年から 2024 年にかけて、筆者は毎年 2〜3 か月程度、中国広東省深セン市とその周辺地域を訪問し、民間信仰と仏教に関する調査を実施した。深セン市を主要な調査地として選んだ重要な理由の一つは、その独特な現代都市としての特徴にある。深セン市は、出稼ぎ労働者・流動人口の割合が高く、都市人口が若く、都市生活におけるプレッシャーが大きく、宗教の歴史が比較的浅い。こうした世俗的な都市特性と脆弱な宗教的基盤は、「都市とその住民が宗教とどのように関わっているか」を考察する出発点となる。

そのうち、仏教寺院で行われるボランティア活動は規模が大きく、多くの都市住民の参加を集めている。2024 年末時点の筆者の現地調査によれば、深セン市には正常に運営されている仏教寺院が 12 か所あり、そのうち半数以上が長期的かつ安定したボランティア活動を行っている。

寺院ボランティア活動への参加やインタビューを通して、筆者はボランティアたちと深く対話する機会を得た。活動への参加は、必ずしも純粋に宗教的な動機に基づくものではない。生活状態の転換、好奇心、食事や住まい

のニーズ、あるいは日常の虚しさなど、世俗的で多様な動機が参加を促している［高 2025］。しかし、同時にいくつかの疑問・課題も残されている。寺院ボランティア活動への参加が必ずしも宗教性に起因しないとすれば、活動は寺院および都市においていかなる機能を果たしているのだろうか。また、そうした活動は人々を宗教へと接近させる契機となり得るのか、さらにそれはいかにして可能となるのか。

以上に基づき、本稿が問うのは、第一に、寺院ボランティア活動が都市寺院の運営と都市空間のなかでいかなる役割を担っているのか、第二に、世俗的な動機から参加する都市住民にとって、その活動がどの程度、いかにして宗教へ接近する経路となりうるのか、という二点である。本稿は、聖と俗の空間的・機能的な区分を軸に、世俗的な都市空間における寺院の役割と、制度の長期的な浸透の可能性という視点を組み合わせて分析を試みる。

なお、同じ調査データを用いた別稿［高 2025］では、活動参加者のうち都市の若者に焦点を当て、その類型と宗教との関係を初歩的に論じた。本稿ではむしろ、寺院と活動の役割、および宗教への経路という問いに焦点を移す。

研究方法はフィールドワークであり、ボランティア活動への参与観察とインタビューを含む。参与観察は、二つの寺院で、2023 年 10 月～11 月、および 2024 年 9 月～10 月にかけて、それぞれ数日間行った。筆者は短期ボランティアとして二つの寺院のボランティア活動に参加し、他のボランティアとの関係を築き、フォーマルおよびインフォーマルなインタビューを行った。合計 13 名のボランティアにインタビューを行ったほか（詳細は表 2）、同じ寺院の僧侶やボランティア団体のリーダー数名とも関係を築き、寺院やボランティア活動の状況についてのデータを収集した。

調査地としたのは、深セン市の Y 寺と B 寺である。多くの地方寺院と比べて、都市部の寺院は観光地としての役割が強い。また、両寺院とも深セン市において長年にわたって安定したボランティア活動を行っている。

なお、本調査の実施にあたっては、Y 寺・B 寺の関係者およびインタビュー協力者に対し、調査の趣旨・目的、ならびに筆者の立場を事前に説明し、録音を含めて口頭による同意を得た。また、得られたデータはすべて匿名化し、寺院名および個人名はすべて仮名として表記している。

本稿の構成について、第 2 節は本稿の視角と枠組み、第 3 節では事例を

扱い、第 4 節で考察を行う。二つの寺院の状況を第 3 節の表に示す。

2. 先行研究と本稿の視角

2.1 現代都市における仏教活動研究

宗教社会学において、都市と宗教の関係は重要なテーマであり続けてきた。伝統的な制度化された宗教が都市において個人化・多様化に直面していることは、もはや目新しい論点ではない［Berger1967；Luckmann1967］。ただしそれは宗教の衰退ではなく、その形態と機能の変容を意味する。宗教は心理的な支えや文化的アイデンティティを提供し、あるいは感情的な慰めや意味づけをもたらす存在として、現代都市においてなお一定の役割を担い続けている［Woodhead・Heelas2005；Ammerman2007］。

また、より機能的な視点からは、都市空間における宗教団体・施設の具体的な役割に焦点を当てた研究が蓄積されてきた。たとえば、在留外国人や移民コミュニティにとって、宗教施設が社会関係を結ぶ結節点として、あるいは社会的・宗教的資本を生み出すネットワークとして機能していることが指摘されている［福田 2007；Jang2017；川添 2020］。しかしこれらの研究は、キリスト教やイスラム教を対象とし、都市地域における小集団や移民コミュニティに分析が限定される場合が多い。現代都市における仏教関連の事例研究は、相対的に不足していると言わざるを得ない。

一方、仏教が深い影響力を持つ東アジアの都市に目を向ければ、都市化の進展に伴う仏教およびその活動の変容が着目されつつある。たとえば中国において、伝統的に農村部や地方寺院を中心としていた仏教の活動は、徐々に都市仏教へと移行しつつある。「都市仏教」（Urban Buddhism）という概念は、都市寺院への集中、高度な組織化、現代都市への適応性といった、この種の仏教実践の新たな特徴を広く捉えている［劉 2011a；劉 2011b］。さらに事例研究では、都市仏教が社会的弱者への支援、文化教育活動、書道・絵画交流、ボランティア活動など、多様な社会活動を通じて都市の文化生活の一部となりつつあることが示されている［杜・翟 2019；王 2020］。しかしながら、ボランティア活動を含め、こうした事例研究は依然として少なく、分析は活動の部分的な理解にとどまっている場合が多い。中国では、具体的な宗

教実践活動をめぐる議論は学術的な深化を欠いているのが現状である。

とりわけ、寺院の活動と社会貢献という視角は、豊かな研究の可能性を内包している。たとえば、日本の寺院研究では、地域社会の人口減少問題や、寺院仏教の継承困難に焦点を当てた議論がある。都市寺院と地方寺院の間にある格差を比較しながら、現代社会における寺院の存続可能性、および社会貢献のあり方を示唆している［櫻井 2016；武田 2017］。本稿は、この「寺院の社会貢献」という視角を中国都市部における寺院ボランティア活動へと拡張し、社会機能の視点から都市空間における仏教およびその活動の変容を考察する。これにより、現代都市における仏教活動研究の空白を埋め、新たな知見を加えることを試みる。

2.2 ボランティア活動と宗教ボランティア活動

本稿の第二の視点は、ボランティア活動というアプローチに立脚する。ボランティア活動は近代西洋の慈善事業から始まり、今日では世界的に普及している。中国では一般に、「物質的な報酬を求めることなく、人間の発展、社会の進歩、そして社会福祉を促進するために、自らの時間とエネルギーを自発的に提供する行為」と定義される［張 2008］。

ボランティア活動研究は、社会的文脈や地域特性の違いに応じて多様なサブ分野へと展開してきた。中国では、大学生をはじめとする若者のボランティア活動や、社会治理(1)におけるその役割に研究の重点が置かれていることが多い。しかし、こうした研究関心が社会治理という実践的な観点に集中する一方で、宗教ボランティア活動のような主題はその射程から外れやすい。さらに、宗教という主題そのものが持つデリケートさも加わることで、宗教ボランティア活動は、都市部で活発に展開しているにもかかわらず、研究上ほとんど取り上げられてこなかった。

実際、中国において、「宗教ボランティア活動」の統一された明確な定義はいまだに確立されていない。さらに、先行研究も極めて限られ、その多くは修士学位論文の段階にとどまっている。例えば、寺院に対するロマンティックな集団の想像力のもとで、ボランティアが「善」に基づく人間関係を築きうると論じたもの［黎 2020］や、寺院ボランティアの考察から信仰の危機を自己アイデンティティの危機の根源と捉える議論［信 2016］があるものの、いずれも活動や現象の表面的な記述にとどまっている。都市における

宗教実践の一形態として、こうした考察の欠如は、これらの活動、ひいては都市宗教の現状を理解する上で妨げとなるだけでなく、都市と宗教の関係をめぐる学問的な見方にも空白を残している。

これに対し本稿は、「参加者の視点」と「社会機能の視点」の双方からアプローチを試みることで、当該領域における研究の空白を埋めることを目指す。なぜなら、ボランティア活動という実践は、寺院という「宗教の内側」と都市という「世俗の外側」を架橋する紐帯として位置づけられ、両者の動的な相互関係を考察するための重要な切り口となるからである。

2.3 分析の視角と本稿の課題

以上の先行研究の検討を踏まえ、本稿は前述の参加者・社会機能という二つの立場を、以下の三つの分析軸を通じて具体化し、寺院ボランティア活動の考察を試みる。

第一に、本稿は「聖」と「俗」の分離という視点から事例を読み解く。ここでの「聖」と「俗」は、宗教的な意味の対立や絶対的な分離を指すのではなく、寺院内部における空間的・機能的な分業を捉えるための区分である。実態として、都市寺院は宗教空間であると同時に、都市住民の世俗的な観光の場としての役割をも担っており、観光資源としての維持のために日常的に多くの観光客を迎え入れる必要がある。そして、ボランティアがまさにその役割を担っている。また、僧侶とボランティアの間にも、「聖」と「俗」の差異が見られる。僧侶が寺院における「聖」の部分を担うのに対し、ボランティアは「俗」の部分を担っている。同一の寺院空間で生活しながらも、直接的な接触はほとんどない。宗教空間としての務めと、都市の観光地としての業務が同時に営まれるなかで、「聖」と「俗」の双方から考察することは、都市の寺院がいかにして自らの正常な運営のバランスを保っているのか、そしてボランティア活動が寺院の中でどのような役割を果たしているのかを把握するうえで有効である。

第二に、参加者が必ずしも宗教的な目的から出発しているわけではない［高 2025］という点を出発点として、彼らがなぜ活動に参加し、一定期間にわたって寺院に留まり続けるのかを問う。ここで手がかりとなるのが、都市特有の生活ストレスである。このようなストレス下において、人々はストレスに対処し、自らの都市生活のバランスを保つための生存戦略を模索す

る必要がある［Adli2017＝2020］。本稿ではこのストレスとその対処の需要という視点から、世俗的な動機を持つ人々の参加と滞留を読み解く。

第三に、世俗的に見える寺院ボランティア活動が、参加する都市の人々にとって、宗教へ接近する経路となり得るのかを検討する。現時点のデータでは、長期的な観察によってこの可能性を実証的に追跡することは困難であるが、本稿では「制度が人の認識を形作る」［Douglas1986］という視点を補助線として用いる。

以上の三つの視点、すなわち「聖」と「俗」の分離、都市生活におけるストレスとその対処、そして宗教へ接近する経路は、寺院ボランティア活動が都市寺院とその空間においていかなる役割を果たしているのかという問いに接近するための手がかりとなる。次節ではまず、都市寺院におけるボランティア活動の具体像と、それが担う役割について説明する。

3. 深セン市における寺院ボランティア活動

3.1 深セン市の基本的な特徴

まず、調査地である深セン市の特徴を説明したい。中国の改革開放政策の先駆的な地域である深セン市は、世界的な影響力を持つ現代都市へと成長した。その独特な都市の実態、経済構造、社会状況は、都市における宗教実践を考察する上で格好の事例を提供している。

深セン市の社会経済的特徴は、一言で言えば、急速な経済発展、高い人口流動性、そして若年層人口の多さである。2023 年、深セン市の GDP は 3 兆 4600 億人民元に達し、前年比 6%増加した(2)。2024 年末時点で、深セン市の常住人口は 1798 万 9500 人で、そのうち深セン戸籍(3)を有する人はわずか 35.1%であった。2024 年の深セン市における住民一人当たりの可処分所得は 8 万 1123 元に達したものの、そのうち居住費の占める割合は 25.7%であった(4)。とりわけ、住民の多数を占める非戸籍の出稼ぎ労働者にとって、その負担はより切実なものとなる。一方、出稼ぎ労働者は深セン社会に高い流動性と活力をもたらしている。2024 年のデータによると、深セン市の住民の平均年齢は 32.5 歳である(5)。

しかし、都市の発展と流動性の背後では、生活や心理のストレスなどの社

会問題がますます顕著になってきている。清華大学新都市化研究院が 2021 年に発表した報告書によると、深センは発展の機会と生活上のプレッシャーが共存する状況に直面している。「2020 年、深セン市の住宅価格所得比は全国 1 位となった。人口の 8 割以上が賃貸住宅を選択しており、高騰する住居費は若年層の所得を大きく圧迫している。また、同市住民の 6 割以上が、精神的なストレスを抱えていると自覚している」という(6)。

一方、深セン市の地域信仰の歴史や宗教的な蓄積は厚くない。小さな漁村から発展した深セン市では、宗教施設の多くが近代以降に新設されたものである。とはいえ、それが活発な仏教活動の展開を妨げているわけではない。2018 年のデータによると、深セン市の宗教信者は約 200 万人で、そのうち 100 万人が仏教信者である(7)。

上述の都市データから判断すると、深セン市は世俗性が高く宗教的基盤は薄いものの、一定の規模の仏教活動が営まれており、なおかつ高ストレスな現代都市であると言える。

表 1　調査地の状況とボランティア活動に関する基本情報（筆者作成）

	都市における寺院の環境	**建てられた時期**	**敷地面積**	**僧侶の人数**
Y 寺	市街地から離れている	1999 年	25000 ㎡	約 10 人
B 寺	ビジネス街に近い	2015 年	5000 ㎡	約 5 人
	ボランティアの種類	**年齢制限**	**一日の勤務時間**	**活動の規模**
Y 寺	長住／随喜	18-55 歳	7:30-16:30	30～100 人
B 寺	当日参加のみ	18 歳以上	8:45-15:45	10～25 人

3.2 調査地 1：Y 寺におけるボランティア活動

筆者は、深セン市にある Y 寺と B 寺において参与観察を行った。両寺院

は深セン市内の地理的な位置、寺院とその付属建築物の敷地面積、そしてボランティア活動の規模において大きく異なっている。また、調査において、寺院の僧侶やボランティアリーダーと良好な関係を築くことができたため、より信憑性のあるデータを得ることができた。

一つ目の調査地である Y 寺は、深セン市北西部に位置し、市内中心部から約 40 キロ離れている。Y 寺は清朝の嘉慶時代に建てられたが、その後いくつかの戦乱により破壊された。1999 年になってから、政府と宗教関係者の協力により徐々に再建された。市内中心部から離れた Y 寺は、山に囲まれた丘陵地帯の静かな環境にあり、その隣には湿地公園と湖がある。

Y 寺には、名目上の住職に加えて、実際の寺務管理者を含む約 10 人の僧侶がいる。深セン市の寺院には、仏学院を卒業した若い僧侶が多い。彼らは修学などの理由で所属を変えるため、寺院の僧侶数は常に変動している。他方、警備や調理などの仕事は、数人の専任の警備員や料理人が担当している。

地理的条件や交通の都合上、寺院を訪れる参拝者はそれほど多くない。公式な統計はないが、僧侶によると、平日なら 1 日に数十人、休日や法会などには百人から千人が集まることもあるという。寺院では、平日でも短期と長期を合わせて 30〜50 人ほどのボランティアが活動しており、多い時には百人に近いこともある。ボランティアの数は毎日変わり、僧侶たちはその日の正確な人数さえ知らないことが多い。また、Y 寺では参加者の年齢を 18 歳から 55 歳までと制限していた。

次に説明したいのは、Y 寺におけるボランティアの活動モデルである。Y 寺での活動は、一時的な活動を行う「随喜ボランティア」と、一定期間活動して寺院に住む「長住ボランティア」の二種類に分類される。長住ボランティアは仕事の範囲が決まった固定作業グループに配属される。Y 寺のボランティアのほとんどは寺院に住んでおり、長住ボランティアとして、短ければ 3〜7 日間、長ければ数か月間にわたり参加する。

一方、随喜ボランティアは通常数人だけである。彼らは寺院に住んでおらず、臨時または短期で活動に参加する。その中には、寺院近くに住み、空いた時間に時折参加する人もいる。その多くは補助的な作業に配置される。

寺院でのボランティア活動の主な作業内容は、寺院内の清掃、整理、運搬、仏殿の当直、食材の下処理、食器の洗浄などである。法会などの宗教的な事務は、もっぱら僧侶が担う。実際、ボランティアリーダーによると、ボラン

ティアの数が多いため、法会・活動以外の毎日の仕事量はそれほど多くなく、午前中に集中している。仕事の性質について、当時のボランティアリーダーの A さんは次のように述べた。

> ボランティアの主な仕事は、寺院の毎日の清掃と維持です。毎日決まった仕事をしなければいけないという決まりはありません。仕事の配分はあくまで大まかなものであり、すべて自分たちの発心で行っており、強制的にこうしなければいけないとは誰も言いません。

ボランティアリーダーの視点から見れば、活動は強制的なものではなく、ボランティア同士の間にも明確な上下関係はない。

寺院の日常生活において、僧侶は寺院後方の生活区域に居住しており、参拝者・観光客の立ち入りは禁止されている。また、ボランティアも物品の運搬などの作業を除けば、この区域に足を踏み入れることは少ない。ボランティアの事務室も、寺院の山門を入ってすぐの前方区域に配置されている。ボランティアたちは、活動の合間の空き時間になると、この部屋に集まってエアコンの効いた室内で雑談したり、あるいは自身の宿舎に戻って休息を取ったりしている。

僧侶が日々の勤行や法要・法会などの宗教業務を担う一方、ボランティアは日常的な寺院の運営・維持事務を担う。両者が直接やり取りする機会は極めて限定されている。

3.3 調査地 2：B 寺におけるボランティア活動

B 寺は 2015 年に建てられたが、新型コロナウイルス感染症の流行後、2022 年前後まで一般公開されなかった。寺院の面積は狭く、各殿を一周するのに 10 分もかからない。B 寺は、市内のある貯水池の隣の低い丘の上にあり、にぎやかな商業地域に隣接し、最寄りの地下鉄駅からは 10 分以内の距離にある。そのため、参拝者が少ない Y 寺に比べて、B 寺には 1 日に数百人の観光客や参拝者が訪れることが多く、人気がある。繁華街に隣接し、境内から見上げると近隣の高層ビルが目に入る。しかし、寺院内は参拝者の往来の影響を受けず、静かで落ち着いた雰囲気が保たれている。

寺院には 10 名にも満たない僧侶がおり、日常の維持管理、警備、清掃、調理などは専任の労務者が担当している。僧侶たちは基本的に寺院内での

法会や法事といった宗教業務のみを行っている。寺院の雑務や整理作業は毎日ボランティアが行っている。B 寺で働くボランティアの主な仕事には、清掃、当直、物品の運搬や倉庫の整理が含まれる。また、参拝者の案内や問い合わせ対応、マナー違反の制止も行う。

B 寺の空間は小さく、宗教施設と僧侶たちの宿泊施設以外に余分なスペースがないため、長住のボランティアを受け入れることができない。ボランティア活動の参加希望者は、事前にボランティアリーダーに連絡し、参加登録をしてもらい、希望日の朝 8 時 45 分から午後 3 時 45 分まで活動する。毎日約 10〜25 名がボランティア活動に参加している。

B 寺のボランティア活動は 18 歳以上であれば参加でき、年齢層が比較的幅広く、退職後の中高年も参加している。さらに、近くに住む専業主婦たちが B 寺のボランティア活動に参加することも少なくない。参与観察中、筆者は 5 人の若い主婦に会い、そのうち 3 人にインタビューした。彼女たちは日中に十分な自由時間があるため、平日に参加していることが多い。

つまり、B 寺のボランティアは、以下のように共通の特徴を持っている。子どもを学校に送り迎えするまでの間に自由な時間を持てるということである。子どもたちを学校に送り届けてから寺院に来て、午後早めに出て家に帰り、料理をして子どもたちを学校に迎えに行くという人が多い。

B 寺においては、僧侶の人数がさらに少なく、平時において食事の際を除けば、ボランティアと直接顔を合わせる機会は多くない。僧侶たちは日々の宗教業務を厳格に執り行っている。その一方、日中はボランティアの労働により、寺院は都市の宗教・観光施設として、日常の運営雑務を整然とこなしている。

3.4 ボランティア団体と仕事の分業

ここまでで、ボランティアの構成について簡単に触れた。次に、ボランティア団体について検討する。簡単に言えば、両寺院において、ボランティア団体は寺院から比較的独立しており、実際には団体内部で管理されている。

活動の性格から見れば、ボランティア活動は自発的なため、参加者は個人として非常に流動的である。一方、ボランティア団体の構成は安定しているわけではないが、緩やかな形で存在し続けている。経験豊富で活動期間の長いベテランボランティアが、新しいボランティアに仕事のやり方を教える。

この経験を伝え、継承する過程で、新旧のメンバーが入れ替わりながらボランティア団体が維持されていく。

寺院におけるボランティア活動の管理は、指定された管理職僧侶が中心となって行っている(8)。管理職僧侶を除いて、他の僧侶たちはボランティアたちと作業に関する直接のコミュニケーションをほとんど取っていない。管理職僧侶は、寺院が必要とする作業や手配を伝えるために、ボランティアリーダーとだけ連絡を取ることが多い。

一方、ボランティアリーダーは、多くの場合、長期にわたって寺院でのボランティア活動に従事してきたベテランボランティアが務めており、中には僧侶に師事する在家弟子も含まれる。ベテランボランティアは管理職僧侶とより深い関係を築くことが多く、寺院の状況をよく把握している。そのため、寺院の日常的な雑務は管理職僧侶の介入をほとんど受けずにスムーズに進行する。管理職僧侶とボランティアリーダーが共同して、寺院とボランティア団体をつなぐ橋渡し役を担っていると言える。

2023 年に筆者が初めてボランティア活動を始めたとき、Y 寺には 4 つのボランティアグループがあった。各仏殿の仕事は主に「大殿グループ」が担当し、清掃、用具の補充や交換が含まれる。「法務グループ」は、宗教活動の準備を支援して寺院内の秩序維持にも貢献する。「斎堂グループ」は台所での料理の準備や用具の洗浄を手伝う。「機動グループ」はその名の通り、仕事があまり固定されておらず、仕事があればどこでも手伝う(9)。

2024 年に Y 寺を再訪した際、ボランティア数の増加に伴い、管理を円滑にし責任を明確にするために、ボランティアグループは 8 つに増設されていた。しかし、筆者の観察ではグループ間の境界は明確ではなかった。忙しいときにはボランティア同士が助け合い、リーダーが手の空いている人を現場で差配していた。ボランティア活動は義務ではないため、一部のボランティアは怠けたり仕事の割り当てを避けたりすることもあった。

2024 年 9 月に作成された B 寺の「護持注意事項」には、ボランティアの分業として、仏殿での当直以外に、「大殿グループ」、「斎堂グループ」、「貢菜グループ」、「機動グループ」に分かれることが明記されていた。また、ボランティアリーダーは、管理職僧侶による差配の下、毎日の人員配置を担当すべきであるとされていた。ただし、実際には少人数のため、日々の作業は基本的にボランティアリーダーの現場指揮に頼っている。

いずれにせよ、基本的なグループごとの役割分担とボランティアリーダーによる臨機応変な差配によって、緩やかで独立したボランティア団体が両寺院の日々の運営や維持などの雑務を担い、それによって寺院の僧侶たちは宗教業務に専念できている。また、寺院が明文化した管理制度から見ても、実際の運営実態から見ても、管理職僧侶とボランティアリーダーが、二つの集団間の意思疎通や寺院の日々の事務調整を実質的に担っている。

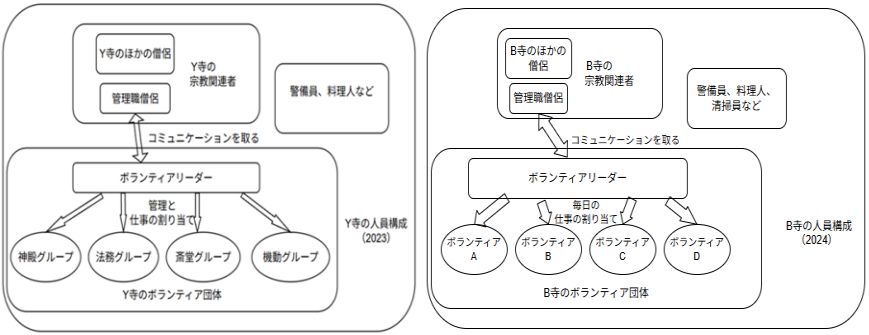


図 1 と図 2　Y 寺・B 寺の人員構成（筆者作成）

3.5 参加者から見た寺院と活動

表 2　インタビュイーの一覧表（筆者作成）

番号・寺院	性別	年齢	参加形態	参加歴／活動実績
A さん・Y 寺	女性	30 代	長住	約 1 年
B さん・Y 寺	女性	30 代	長住	5 年
C さん・Y 寺	女性	30 代	長住	6 年
D さん・Y 寺	女性	30 代	長住	初参加
E さん・Y 寺	女性	20 代	長住（4 日）	初参加
F さん・Y 寺	男性	40 代くらい	長住	未回答
G さん・Y 寺	男性	40 代くらい	長住	数か月
H さん・Y 寺	女性	30 代	長住	2 回目

J さん・Y 寺	男性	20 代	長住	長年
K さん・Y 寺	男性	40 代	長住	過去多数
L さん・B 寺	女性	30 代	当日	1 か月弱
M さん・B 寺	女性	30 代	当日	初参加
N さん・B 寺	女性	30 代	当日	2 日目

表 2 が示すように、対象者の属性には女性および 30 代にやや偏りが見られる。これは、男性や他の年齢層への聞き取りが相対的に困難であったという制約によるところが大きい。ただし、女性や子育て世代が参加者の一定割合を占めることは、活動の実態を一定程度反映しており、本稿の事例はその一端を示すものである。

では、実際にボランティア活動に参加している人たちは、自分たちの行動をどのような気持ちで捉えているのだろうか。参加動機の包括的な整理は別稿［高 2025］に譲るが、議論の連続性のため、その多様な動機にここでも簡潔に触れておきたい。

長住ボランティアにとっては、静かな環境が特に魅力的であることが多い。D さんは、「ここの環境が気に入っています。とても静かです」と語り、多くのボランティアも同様に穏やかさを感じているという。中には、都市生活のプレッシャーから逃避し、あるいはそれを調整するために静かな寺院に来た者もいる。H さんは会話の中で深センという都市に対する思いを次のように語った。

> 私は一種の逃避としてここ（寺院）に来ました。（中略）ここ（深セン市の都市環境）は忙しすぎて好きではありません。（中略）この街は快適さやレジャーのためではなく、仕事、お金、そして効率性のために作られたのです。（中略）不安は、まずは生活水準が他の地域よりも高いという事実から生じています。ここ（深セン市）で生きていくには、より多くの経済的な準備が必要です。

H さんにとって、ボランティア活動は、都市の生活とは違った安心感をもたらしてくれる。また、普段は海外貿易に従事する K さんは、都市の喧騒を離れた静かな生活を求めて Y 寺で活動し、活動中は携帯電話を持ち歩か

ず、心身を休めたうえで再び多忙な都市生活へと戻っていく。

さらに、E さんのように活動への好奇心から、4 日間のボランティアへの参加を選択するケースもある。「寺院ボランティアについては、SNS で多くの人が参加しているのを目にしたのがきっかけです。たとえば禅修やボランティア、なんとなく面白そうだと思って。(仏教) 信仰は特にありません。」他方、B 寺の専業主婦である M さんは、自宅で寝転がりながらショート動画をスクロールして日々を過ごす生活に嫌気がさし、ボランティア活動への参加に踏み切ったのである。

インタビューに応じたボランティアの参加動機を総合すると、大半の者が初回の参加時に明確な仏教信仰を前提としていなかったことがうかがえる。Y 寺の D、E、F、G、H のいずれも、信仰を示さないか、明確に信仰がないと述べていた。また、B 寺で聞き取りを行った若い主婦たちも、友人や家族の勧めで参加したものの、自身にはまだ宗教信仰がないと述べていた。

さらに、活動の性質そのものに疑問を抱く者さえ存在した。好奇心から参加した E さんは、食器洗いなどの作業を「想像していた活動とは異なる」とし、「私たちがボランティアでやっているようなことは、実は仏教や寺院の本質からはかなりかけ離れています」と語った。また、G さんも、起業の機会の模索や生活の過渡期を過ごすことを目的に参加したが、「2、3 ヶ月になるが、体験としてはあまり良くない」と吐露した。ほかにも、「なぜ宗教活動ではなく、清掃や衛生に関する肉体労働ばかりをしているのか」という不満の声もあった。こうした感覚は調査対象者に限らず、中国のソーシャルメディアでも、好奇心から参加した人々が「日々の活動の多くは宗教との直接的な関連性が見出せない」と記す例がしばしば確認される。

H さんは、Y 寺の活動に参加する前に、より過酷な別寺院を経て Y 寺に移った。彼女は「理由の一つは、睡眠時間が深刻なほど不足していたこと。（中略）最初は斎堂にいたが、私一人しかボランティアがいないため、処理すべき仕事が多すぎた」と不満を漏らした。そして当面は就職活動を望まない一方で、自宅で漫然と過ごすことも嫌悪したことから、彼女は Y 寺に赴き、年越しまで滞在した後に改めて仕事を探す選択をしたのである。

その一方で、活動に参加して間もないボランティアにおいては、疑問や不満が確認されやすいものの、一部のボランティアの語りからは、寺院活動が彼らに与えた影響や、その内面に生じた変化を明瞭に捉えることができる。

Y 寺で一定期間ボランティアリーダーを務めていた A さんは、「以前は自分の利益ばかりを考えていることが多かったのですが、ここに来てからは、まず『衆生を利益する』ことを考えるようになり、内面的に多くの変化がありました」と語った。また、インテリアデザイナーの C さんは、不眠症の緩和を目的に活動に参加したものの、寺院に身を置くことで心の静けさを得られると感じるようになった。無神論者である彼女は、寺院の醸し出す雰囲気に親しみを感じており、長期的な参加を通じて、以前の浮ついた心理状態が次第に穏やかなものへと変化していったと自認している。

参加期間がそれほど長くない D さんは、自身が仏教を信仰しているとは言えないと考えている。しかし、それでも活動参加後の自身の変化を肯定的に捉えている。「以前は寺院に入っても敬意を持っていませんでしたが、（寺院の仕組みや生活を）理解した今は、形式的には実践できないことがあっても、内面では少なくとも敬意や尊重の念が生まれるようになりましたし、形式面でもできることは遵守しようとしています」と語っている。また、20 代の J さんは、体調不良から長期にわたり活動に参加し、寺院の規律や規則正しい生活習慣を守った結果、健康状態が著しく改善しただけでなく、以前の遊び好きな性格から、より自己を律する状態へと変化したと考えている。

さらに特筆すべきは、B 寺の M さんの事例である。2024 年のインタビュー時、彼女は日常生活の退屈を紛らわせるために、ボランティア活動を始めたばかりの段階にあった。しかし 2025 年には、ボランティア活動の WeChat グループにおいて、彼女が時折その日のボランティアリーダーを担い始めているのを筆者は確認するに至った。さらには、筆者に対して B 寺の活動へ再び参加するよう誘うことさえあった。彼女の言葉の端々からは、仏教思想への親しみも明確に読み取ることができた。ボランティア活動は、彼女にとってすでに「日常」の一部として定着しているのである。

もう一つの事例は B さんのケースである。B さんは 30 代後半の既婚女性で子どももおり、普段は中小企業の経営に携わっている。彼女は 5 年ほどのボランティア経験を持ち、時折時間を作って寺院でのボランティア活動に参加し、暮らしの中に喜びを見出している。

> 初日はとても焦っていて、少し場違いな感じがしました。しかし、一日触れ合って理解すると、突然何かに目覚めたような気がして、次の日

からボランティア活動に励みました。（中略）ボランティア活動に参加してから、その環境が毎日だんだん楽しくなり、半月ほどそこに滞在したのが初めてのボランティア活動でした。

他方、寺院の立場からすると、ボランティア活動は寺院で行われる宗教活動であり、仏教の修行の一環でもある。インタビューを受けた僧侶は、「若者がボランティア活動を通して仏教を学ぶのは良いことです」と語った。「しかし、大変な仕事をしたくない人もいます。実際、（ボランティア活動の）仕事が大変で疲れるほど、福報は大きくなります」という。

4. 考察

4.1 ボランティア活動の役割と都市寺院の社会機能

都市の視点から見ると、Y 寺と B 寺は、まさに世俗的な都市空間の中で独特な寺院・宗教空間としての存在を維持している。そして、都市部の寺院は単に閉鎖的な宗教施設ではなく、都市に立地する以上、経済・政治・文化といった世俗的な都市社会と関わらざるを得ない。例えば、市内の大規模な観光景観の一部となるという関わり方がある。都市寺院はまた、宗教セミナーの開催や地域計画への参加など、都市の宗教的ニーズや政府の政策変更に対応する必要もある。筆者の調査でも、一部の寺院が都市内で文化イベントを開催している。例えば、Y 寺では中秋節に廟会[10]を開催し、多くの人々を集めている。他方、市内最大級の某寺の事例を挙げると、休日には 1 日あたり 1〜2 万人規模にのぼる観光客が押し寄せる。そして、寺院側は昼食・夕食の時間帯に、一般の参拝客に対して無料の斎飯[11]も提供する。こうした大都市の寺院は、都市住民が抱く宗教的ニーズに応える一方で、膨大な業務量が生む大きな運営上の負担にも直面しているのである。

逆に言えば、こうした日常的な運営上の負担が都市寺院に与える影響も甚大である。これにより、都市に本拠を置く寺院は、宗教業務を遂行する一方で、世俗的な雑務をも並行して処理せざるを得ない状況に置かれている。たとえば、境内で使用される宗教用品や日用品の運搬・手配、日々の斎飯の準備や食器の洗浄などがこれに該当する。Y 寺や B 寺のように、僧侶の人

数が限定的であり、なおかつ日々の宗教業務を抱える中で、こうした人手を要する作業や雑務に僧侶が関与することはほとんどない。ボランティアたちは、寺院の労働力不足を補完する重要な役割を担っている。

第 3 節における寺院ボランティア活動の実態を踏まえると、ボランティアは寺院の「世俗的側面」を担当していると言える。清掃、調理補助、運搬など、日々の事務や雑務が順調に維持・遂行されている。その一方で、僧侶は寺院の「宗教的側面」を担い、日々の勤行や礼拝、各種宗教活動・行事に専念することが可能となっている。そして、これら僧侶とボランティアという二つの集団の間においては、管理職僧侶とボランティアリーダーが架け橋の役割を果たしている。両者間のコミュニケーションが二つの集団を連結させることで、寺院内におけるそれぞれが職責を全うする状態が実現しているのである。寺院における「聖」と「俗」は、この明快な役割分担メカニズムによって境界づけられており、それによって寺院自体も、世俗化された大都市における多忙な空間として正常な稼働を達成している。

ここで、都市における寺院、および寺院内におけるボランティア活動の役割について、より機能的な視角から再考してみるならば、これこそが世俗的都市において宗教的空間が存続し、その運営を維持するための重要な方式であると換言できるだろう。都市における観光・運営上の負担と、寺院自体が抱える僧侶の人手不足という二重の課題に対応するために、寺院は内部において聖俗を峻別している。「俗」の部分をボランティア組織へと実質的にアウトソーシングすることによって、自らの組織運営のバランスを保っているのである。これに対比して、地方の寺院においては、多くの場合これほど大きな運営上の負担を抱えておらず、僧侶や少数の手伝い（たとえば近隣の村民）だけで対応可能であり、ボランティア活動に対するこれほど大きな需要は存在しない。さらに敷衍すれば、この「聖」と「俗」の分業メカニズムが、「都市型」寺院にとって構造的な必然性を有していることを意味する。すなわち、ボランティア活動こそが、現代中国の都市寺院が内包する複合的な社会機能を支える、不可欠な構造の一部をなしている。

4.2 世俗的動機からの参入と「異質な空間」の体験

Y 寺は、都市内にありながらも街の喧騒から離れている。ボランティアの仕事も生活も、寺院の独自の空間の中で完結できる。ここでのボランティア

は、寺院ボランティア活動に参加したり一定期間寺院で生活したりすることで、都市の日常生活とは異なる異質な生活を体験できる。B 寺では、近隣住民がボランティア活動を通じて日常の退屈さを変え、日常とは異なる体験を得ている。多くのボランティアにとって、活動への参加は、さながら都市の中の「異質な空間」に足を踏み入れるかのような体験となっている。

また、彼らの目的も、完全に宗教的関心に起因しているわけではない。むしろ、インタビューに応じたボランティアの事例を見る限り、その多くがより世俗的な動機に基づいて活動に参加しているといっても過言ではない。

宗教信仰を持たない H さんは、都市生活から逃避することを目的に寺院を訪れ、暇にしていたくもない時間をやり過ごすことができている。同時に、寺院での生活は彼女の都市に対して抱いていた不安感を解消している。K さんにとって、都市における一切の社会的関係から一時的に断絶された寺院生活は、安らぎとリラックスをもたらすものであった。また、B 寺の複数の事例に代表されるように、都市の専業主婦は、活動への参加を通じて、空虚感の中で時間を浪費するのではなく、平日の日中に生じる退屈を払拭しているのである。

そして、こうしたボランティアたちの世俗的動機に着目するならば、その多様化した動きは、彼らが生きる現代都市生活の文脈と切り離せない関係にあると言える。都市生活は忙しい。騒音、人混み、競争、そして目まぐるしい生活ペースといった問題がさまざまなプレッシャーを生み出し、都市に住む人々の緊張感やストレスレベルを高めている。人々はしばしば、こうしたストレスを自身の人生経験や感情と結びつけてより複雑な個人的な体験を生み出している。さらに、こうした緊張感とストレスは人々を疲れさせ、精神的にも肉体的にも健康を損なう可能性がある［Adli2017＝2020］。

こうしたストレスに対し、都市住民は様々な方式でその緩和を図っている。旅行、消費、あるいは近年ではショート動画に代表されるデジタルエンターテイメントなど、その多くは都市が提供する消費文化的なサービスに支えられている。これに対し、寺院ボランティア活動は、一つの異質な選択肢として立ち現れる。すなわち、都市の生活リズムそのものから一時的に身を引き、都市とは異なる非日常的空間に身を置くという方式である。そして、寺院がボランティア活動を通じて提供する空間は、まさにこうした需要と合致している。

この異質な空間の体験を通じて、都市からやってきたボランティアたちは、都市の生活リズムや張りつめた空気から一時的に解放され、精神や心境を調整することができる。彼らは寺院内において、「俗」の領域に属する作業を割り当てられ、担っている。しかしながら、都市との対比において、この空間体験は彼らにとって「異質」であり、ひいては「聖なる」領域に近いものとして感受されているのである。それゆえ、都市側のこの需要は、世俗的な動機によって駆動されているボランティアたちに対して、活動への継続参加を促す要因となる。なぜなら、これが都市生活における自己のバランスを維持するための有効な方式となっているからである。そして寺院は、ストレス下にある都市住民の日常生活の調整と補完に参加し、独自の機能を全うするとともに、都市への貢献を果たしていると言えるだろう。

しかし一方、こうした異質な空間における滞在時間の差異は、彼らの意識に一定のバリエーションをもたらす。この点こそが、4.3 においてさらに深化させて検討を行う、「宗教性」をめぐる問題へとつながっていくのである。

4.3 世俗的実践から宗教への経路の可能性

寺院およびその活動について考察する際、考えざるを得ない重要な問いが一つ存在する。本稿の事例が示すように、多くのボランティアは、より世俗的な動機に基づいてこの異質な空間へと赴いており、その中には信仰心を持たない者や、懐疑的な態度をとる者さえ含まれている。では、寺院でのボランティア活動は、果たして都市住民が宗教性を感知し、宗教を受容する契機となり得るのだろうか。

都市の寺院が、都市空間において異質な聖なる空間を提供する責任を負っていることは疑いの余地がない。しかし、4.1 において寺院における「聖」と「俗」の領域が、僧侶とボランティアによって明確に分担されていることを提示した通りである。僧侶とボランティアのそれぞれの活動状況を合わせて検討すると、寺院内では役割と空間の明確な分離が見られる。ボランティアと僧侶は、同一の物理的空間に生活しているものの、仕事や生活における直接的な接触はほとんどない。このように物理的には同一空間にありながらも、異なる役割、さらには寺院内において聖と俗の意味空間までもが明確に区分されている。こうした状況下では、ボランティアが自ら宗教の学習活動に踏み込むか、僧侶が能動的に布教を行わない限り、宗教性そのものが

聖的な意味空間から世俗的な意味空間へと及ぶことは決して容易でない。

インタビューにおいて、とりわけ管理職僧侶は、ボランティア活動を一種の宗教的修行として明確に位置づけていた。「仕事が大変で疲れるほど、福報は大きくなります」という。しかし、世俗的な役割にあるボランティアたちは、必ずしもこうした意味を感知・受容するわけではない。このことは、聖と俗の分離が、両者の主観的な意味の次元においても存在していることを示している。

実際、E さんが自らの活動内容について、寺院や仏教の本質とはかけ離れていると考えており、G さんも活動の体験に対して不満を抱いている。インタビューや閑談を行ったボランティアの中にも、活動そのものに対して一定の疑問を投げかける者が数名見られた。こうした疑問はソーシャルメディア上でも散見され、好奇心から活動に参加した一部の者は、自らの行っている活動が肉体労働や家事労働に類するものであると認識している。このような世俗的な目的を伴い、かつ短期的な参加が中心となっている状況を鑑みると、寺院の宗教性がボランティア活動を通じて伝達されにくい側面が存在していると言える。

一方で、忘れてはならないのは、寺院そのものが、仏教的な規則・制度を内包する制度的空間であるということだ。寺院の中で生活するかぎり、僧侶であれボランティアであれ、寺院の起居、食事制限、行動規範、礼儀作法といったあらゆる宗教的制度に従うことになる。制度は人々の思考を形作り、アイデンティティに影響を与える［Douglas1986］。長期にわたって活動に参加し、その環境に浸透していくなかで、人々の自己認識や宗教との関わり方が、寺院や宗教によって緩やかに変容していく可能性がある。A さんが「自分のことだけを考える人間から、衆生のことを考えるようになった」と感じるようになったこと。J さんが長期的な参加を通じて体調を整え、仏教の規則を自律的に守るようになったこと。また 2024 年に生活の虚しさを埋めるために活動に参加し始めた M さんが、2025 年には活動への理解を深めたボランティアリーダーへと成長したこと。さらには無神論者の C さんが神仏の存在を依然として信じないながらも、寺院に親しみを覚えるようになったことが挙げられる。これらはいずれも、寺院ボランティア活動への参加によってもたらされる変化は、劇的なものではなく、むしろ緩やかなものであり、長期的な取り組みが必要であることを裏付けている。

本稿では、こうした過程を「宗教への経路」と呼ぶ。すなわち、教義の学習や宗教者による布教によってではなく、世俗的な動機から参加した都市住民が、寺院の制度的生活への継続的な関与を通じて、宗教性へと緩やかに接近しうる間接的な経路である。もっとも、こうした経路はすべての参加者に等しく開かれているわけではない。前述のように、世俗的な動機のもと短期的な参加にとどまる者にとっては、活動はしばしば単なる労働として経験され、宗教性へと接続しないまま終わることも少なくない。この意味で、「宗教への経路」はあくまで一部の長期的な参加者に見いだされる可能性にとどまるだろう。ただし、現時点では長期的な事例が限られており、この段階の考察にとどまらざるを得ない。より深い検討は、今後の長期にわたる調査と追跡に委ねるほかない。

以上を総括すれば、寺院のボランティア活動は二重の機能を担っていると言える。一方では、都市寺院に運営上の支えを提供し、寺院の都市的運営機能を再生産する。他方では、一部の都市住民にとって、宗教へ緩やかにアクセスしうる経路を構成する。そして、この活動が対内・対外の二つの機能を同時に持ちうるのは、それがまさに宗教と都市、すなわち聖と俗の境界上に位置しているからである。ボランティア活動が世俗的な労働を分離・分担することで、寺院は正常に運営されるとともに、世俗の都市住民が寺院という制度的空間へと引き込まれ、宗教空間へと緩やかに接続していく条件が整えられる。そして、深センという世俗的で高圧的な都市においてこそ、寺院のボランティア活動は、都市寺院の正常な運営を支えながら、同時に世俗空間における都市住民の宗教へのアクセス可能性を静かに維持する仕組みとして機能している。これが、都市寺院の社会的機能にほかならないだろう。

5. 終わりに

世俗化が進み、かつ高ストレスな現代都市である深セン市を対象に、本稿では二つの寺院におけるボランティア活動を事例として取り上げた。参加者の視点および社会機能の観点から、当該活動が寺院と都市において果たす役割を論じ、あわせてボランティア活動と宗教性との関係を検討した。

二つの寺院におけるボランティア活動の状況から見ると、活動は寺院内

で分離された「俗」の部分を担うことで、都市寺院の正常な運営を維持している。そして寺院は、ボランティア活動を通じて「異質な空間」として機能し、高ストレスな都市における人々の切実なニーズを満たすことで、参加者を引き込む可能性を保っている。特に長期的な参加者にとって、寺院でのボランティア活動は、宗教性へと緩やかに接近する間接的な経路を構成しうると考えられる。そして、寺院でのボランティア活動が宗教と都市、すなわち聖と俗の境界上に位置しているからこそ、それは対内・対外という二つの社会的機能を同時に持ちうるのである。

さらに言えば、ボランティア活動は都市寺院の正常な運営を維持し、高ストレスな都市に生きている人々に異質な「調整」の空間を提供すると同時に、世俗的な都市における宗教へのアクセシビリティを下支えしている。これは、現代の世俗的都市における寺院およびその活動による、一つの社会貢献にほかならないと言えるだろう。

それでもなお、未検討の問いが残されている。

本稿は、限られた長期的なボランティア事例を通じて、宗教性へと接近しうる経路を構成する可能性を提示したものの、これをさらに深く、かつ包括的に考察するためには、今後もより多くの、長期にわたる事例の蓄積が必要である。これは今後の課題としたい。また、本稿は参加者の視点に焦点を当てたが、寺院活動の展開と参加者のライフヒストリーを関連づけた考察や理解については、未だ十分とは言えない。なお、本稿では、ボランティア活動研究の視点ではなく、宗教社会学の方法論を用いている。今後、福祉や世俗的ボランティア活動との比較分析を組み合わせることで、宗教ボランティア活動の特徴が浮き彫りになり、その全体像と独自性をより明確に提示できるだけでなく、ボランティア研究への貴重な洞察も提供できると考えられる。

ただし、聖俗を問わず、都市寺院が都市住民の生活を補完し、寺院ボランティア活動が宗教と都市の空間を実践的につないでいることは間違いない。本稿ではほんの一端しか紹介できなかったが、都市における寺院およびその活動をめぐって、考察に値する興味深い現実が、なお数多く残されている[(12)]。

註

(1) 社会治理とは、中国共産党の指導下で、政府、企業、社会組織、住民などが協働・参画し、社会の正常な運営を目指すシステム的な取り組みである。
(2) 深セン市商務局，2024,『2023 年深セン GDP 同比増 6.0%』，深セン政府在線，（2026 年 6 月 15 日取得，https://www.sz.gov.cn/cn/zjsz/fwts_1_3/yxhjjc/content/post_11131041.html）.
(3) 戸籍制度は、中国が国民に対して実施している人口管理政策である。地域戸籍の有無は、その地域で受けられる社会保障や医療保険などの給付に、ある程度影響を与える。
(4) 深セン市統計局・国家統計局深セン調査隊，2025,『深セン市 2024 年国民経済和社会発展統計公報』，深セン政府在線，（2026 年 6 月 15 日取得，https://www.sz.gov.cn/cn/xxgk/zfxxgj/tjsj/tjgb/content/post_12190855.html）.
(5) 深セン市人民政府広報室，2025,『深セン概覧・人口』，深セン政府在線，（2026 年 6 月 15 日取得，https://www.sz.gov.cn/cn/zjsz/gl/content/post_12318786.html）.
(6) 清華大学中国新都市化研究院，2021,『人民幸福指数研究報告 2021』，清華大学，（2026 年 6 月 15 日取得，https://tucsu.tsinghua.edu.cn/__local/5/AE/C0/6B9E0981AB04FC9D30BD98895A2_09C2BD96_601732.pdf?e=.pdf）.
(7) 本来引用されていたのは、中国政協深セン市委員会の公開提案第 18840727 号（タイトル『関于将宗教場所規劃列入深セン市城市発展規劃的提案』）だった。2026 年 6 月現在、この提案は公開されている政府文書には記載されなくなった。また、近年の宗教人口データは現在公開されている深セン市政府データからは入手できない。そのため、データの出典はここに記すにとどめる。
(8) 中国の寺院制度では、この部分の寺務は「知事僧」が引き受けることが多い。説明の都合上、本稿では「管理職僧侶」という名称を使用する。
(9) 前述の「随喜」、「長住」および各グループ名は、調査先寺院での呼称をそのまま用いた。「法務」は法会など儀礼関係の業務、「斎堂」は寺院の食堂、「貢菜」は仏前の供物を指す。
(10) 中国では、寺院、道観、神祠などの宗教施設を「廟」と呼ぶことがある。通常、祝日や神々を祀る日に、廟の周辺では、宗教、商業、娯楽、文化が融合した民俗行事が開催される。これを「廟会」と呼び、日本の「縁日」にあたる。
(11) 中国の寺院の場合、「斎飯」とは、動物性食品や五葷を使わない菜食を意味する。多くの寺院では、昼食および夕食の時間帯に、一般の参拝者や観光客に対して斎飯を無料で提供している。また、一部の寺院では、食事の利用者に対して、任意で「喜捨」を求める場合もある。
(12) 本稿は、拙稿「中国の都市若者の宗教活動参加に関する研究」と同じデータを用いているものの、論点を異にする別の論文である。

参考文献

Adli, Mazda, 2017, *Stress and the City: Warum Städte uns krank machen. Und warum sie trotzdem gut für uns sind*, C. Bertelsmann Verlag.（田汝麗訳 2020『城市与圧力』中信出版集団。）

Ammerman, Nancy T., 2007, *Everyday Religion: Observing Modern Religious Lives*, Oxford University Press.

Berger, Peter L., 1967, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, Anchor Books.

Douglas, Mary, 1986, *How Institutions Think*, Syracuse University Press.

杜立婕・翟松 2019 「都市仏教社会工作実践研究：以上海、西安、成都三地的寺院活動為例」『広東工業大学学報：社会科学版』19(1): 13-18.

福田友子 2007 「移民による宗教団体の形成―滞日パキスタン人ムスリムを事例として」『日本都市社会学会年報』25: 63-78.

高天霖 2025 「中国の都市若者の宗教活動参加に関する研究―広東省深セン市の仏教寺院ボランティアを例に―」『21 世紀東アジア社会学』14: 186-203.

Jang, Hyung-Chull, 2017, “Practicing Filipino Catholicism in Korea: Characteristics of Hyehwa-dong Filipino Catholic Community (HFCC) in Seoul”, *Korea Journal* 57(4): 72-97.

川添航 2020 「在留外国人の社会関係形成・維持における宗教施設の役割―茨城県南部におけるフィリピン人を事例に―」『地理学評論 Series A』93(3): 221-238.

Luckmann, Thomas, 1967, *The Invisible Religion: The Problem of Religion in Modern Society*, Macmillan.

黎唯科 2020 「城市空間原真性的互構：都市寺院義工生活的民族志研究」蘭州大学社会学研究科 2020 年度修士学位論文。

劉旭 2011a 「“都市仏教”辨析」『学術月刊』43(2): 62-67.

劉旭 2011b 「“人間仏教”的問題及都市仏教研究」『世界宗教研究』2011(1): 59-66.

櫻井義秀 2008 「若者とカルト：書き換えられる記憶のゆくえ」『現代のエスプリ』490: 150-159.

櫻井義秀 2016 「過疎と寺院―真宗大谷派」櫻井義秀・川又俊則編『人口減少社会と寺院：ソーシャル・キャピタルの視座から』法藏館。

武田道生 2017 「〔書評〕櫻井義秀・川又俊則著『人口減少社会と寺院―ソーシャル・キャピタルの視座から』」『宗教と社会』23: 138-142.

譚徳貴 2018 「関于済南市 d 観義工群体的考察与反思」『世界宗教研究』2018(1): 130-137.

王浩霖 2020 「都市寺院的宗教実践研究」西南大学宗教学研究科 2020 年度修士論文。

Woodhead, Linda, and Paul Heelas, 2005, *The Spiritual Revolution: Why Religion Is Giving Way to Spirituality*, Blackwell.

信元 2016 「北京竜泉寺常駐青年義工自我認同建構研究」中国青年政治学院思想政治教育研究科 2016 年度修士学位論文。

張斐 2008 「中国志願服務立法研究」重慶大学民商法研究科 2008 年度修士論文。